

## 我が職場における安全活動 (911)

合川営林署・三里担当区事務所 三浦 輝雄

安保 公頭 外13名

はじめに

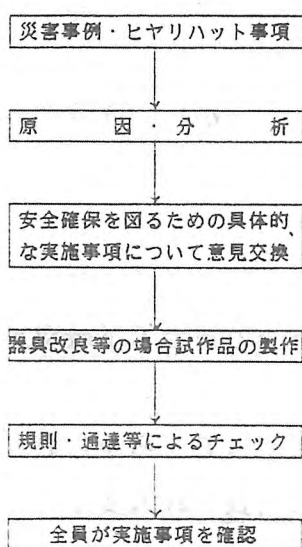
私達の担当区は、昭和49年度以降16年間無災害を継続中ではありますが、今年度、当局管内の造林事業における労働災害の発生件数は、夏山の上半期である7月末で、昨年同期を大巾に上回り憂慮すべき事態となりました。

これらに係る安全対策につきましては、その都度、安全指導を受けてまいりましたが、私達も、このような事態を深刻に受け止めるとともに、私達の職場の無災害を更に継続するため、これまでと違った具体的に突込んだ話し合いの場を持つことにいたしました。

8月からこれに取り組みましたが、夏山下半期に私達が緑十字を有効に活用し、仲間同志の話し合いを通じて、類似災害の防止に取り組んだ事項について発表しますので、皆さん方のご指導とご意見をいただきますようお願いいたします。

### 1 自主的な安全活動

図-1 自主的な安全活動の手順



当署管内は平均標高が200m～300mに位置する里山地帯で、人工林率が92%にも達しております。

私達は、これらの造林地が、健全で質量ともに立派な山に成林するように毎日安全作業に心掛けながら作業に当たっております。

安全作業を進めるに当たっては、特に目新しいことを実施しているわけではありませんが、仲間の安全意識を高めるためにと、これまでの災害事例を教訓として、その安全対策等について、突込んだ話し合いをすることにしました。

図-1は、その手順を示したもので、自主的に皆で疑問点や意見を出し合うように努めました。

他署の災害事例を、これまでの私達の作業の総点検をする意味からも、自分達の現場に置き替えての話し合いを行なったところ、回を重ねるに従い各自が体験した

ヒヤリ・ハット事項も出されるようになり、原因分析も容易にできるようになりました。

また、安全対策については、作業基準・作業要領等に定める基本的事項の理解に努めるとともに、創意工夫をこらした具体的な実施事項をその対策の中に生かすように心掛けました。更に、私達が毎日何気なく使用している器具類にも目を向けて、より安全性を確保するためにはどんな小さなことでも、積極的に改良に向けて取り組む環境づくりにも努めました。

そして、実施事項を取りまとめるに当たっては、署の指導も受けながら、自分達の安全は自分達が責任をもたなければならないという自覚をもつためにも、各自の意見が十分反映されるように努めました。

私達は、これらの活動を通じて何よりも収穫であったのは、災害は未然に防止することが如何に大切であるかということを確認したことでもあります。今後も、チームの和を大切に、より成果を上げることのできるような話し合いを続けていきたいと考えております。

それでは、私達がこれまでに取り組んだ具体的な実施事項について述べることにします。

## 2 具体的に取り組んだ事項

### (1) 蜂巣の除去について

当担当区部内は、従来から蜂の生息が多いところで知られており、毎年、私達は蜂刺され災害の防止には苦慮しております。

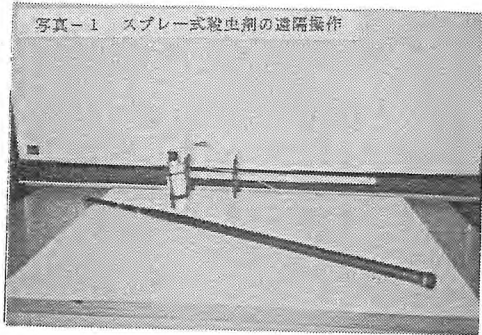
特に、蜂ショック経験者が14名中過半以上占めていることから、危険期の作業となる下刈・地拵時期には、必ず誘引補殺器を作業地の要所に設置し、事前見回りと併せ予防対策に努めているところです。

また、蜂ショック経験者には抗ヒスタミン剤の携行、吸出器（インセクトボイズンリムパー）、簡易担架の現地への備付けなど、万一の場合の事後対策にも万全を期しているところです。

しかし、蜂は年々猛威を振るい、各署でも大きな問題としてとらえられるようになり、昨年も、誘引補殺器による研究発表が3題も発表され大変参考になったところです。

さて、私達が蜂巣の除去を思いついたのは、今年度の新植箇所ですズメバチの生息箇所が、一記番内に（一小班内）3箇所も確認された時であります。下

刈作業の場合は、その周辺に近寄らないで作業を進めていくことができますが、新植作業では同じ箇所ですべての作業期間を要することから、蜂ショック経験者の仲間の不安を取り除くためにも慎重に除去作戦について話し合い、写真-1の用具を考え使用することにしました。



この用具は、スプレー式殺虫剤を遠隔操作するもので、製作に当たっては蜂巢から安全な距離を保つこと、作業地への運搬に負担にならないことに配慮しました。

用具の材料は、釣竿（振出し竿）とテレビアンテナでいずれも廃品を利用したものです。

このスプレー式殺虫剤は、テレビアンテナの先端部にスプレー式殺虫剤をチューブで固定させ、その心棒に釣竿（振出し竿）を継ぎ足しできるようにします。そして、スプレー式殺虫剤の手動部分に遠隔操作の装置を施したものです。

また、釣竿の部分は、振出した釣竿の元口より殺虫剤を注入し、蜂巢周辺に散布する場合にも使用できます。（水道工事用のビニールパイプ・ポールでもできます。）この場合、殺虫剤は予め携行缶等に準備し現地に運搬することになります。

実験に当たりましては、主任を中心に十分打合せの上、防蜂網、雨合羽（シルバーレインズスーツ）、防蜂手袋を完全着用し、蜂の活動が活発となる日中をさけて始業時早々に実施しました。スプレー式殺虫剤の噴き出し口を巣穴にしっかりと向けて固定した後、遠隔操作により連続作動したところ、巣の中の蜂が一斉に外に飛び出て周辺を飛び回りましたが、やがて数分後、どこへともなく飛び去っていきました。戻ってくる遊び蜂については、休憩時前と下山時に再度操作し、これらの蜂を駆除しました。そして、下山時には土中の巣も考慮して、唐鍬で巣穴周辺に土をかけ踏み固めて巣を処理し、一日で作業を終了しました。

蜂は巣を除去したからといって生息密度の低下については、あまり期待できないと聞いております。しかし、蜂の死骸はそれほど確認できませんでしたが、一旦殺虫剤に触れた蜂はやがて死亡するといわれており、作業箇所から完全に蜂を追い払うことができ、翌日以降は蜂の飛来が見当たらず、仲間が安心して

作業ができるという大きな成果が得ることができました。

蜂巣は必ず除去するというのではなく、現地の状況・作業の支障の程度を十分考慮して判断すること、また、より安全で効果を高めるためには、スプレー式殺虫剤の遠隔操作と殺虫剤を散布する方法との併用も検討したいと考えております。

## (2) 足元の確認の励行について

足元の不確認による災害は、造林事業の災害の中で最も多いといわれております。私達も、深刻にこれを受け止めて、毎日のミーティングの中では、作業箇所や気象条件に応じた十分な話し合いを行ない注意を喚起しているところです。

このように足元の確認は、各自の注意力に委ねられるところが大きいことから、随時、注意事項を確認し合うことに努めました。

ア 作業箇所の移動に当たっては、事前に蜂の見回りと併せ、次の作業箇所となる歩道の整備に努めました。

特に、歩行上の支障となるつる類、枝条等を除去するとともに、滑りやすく注意を要する箇所等については、赤スプレーを塗布した杭で標示するなど、事前に講じた措置に各自が責任をもって注意するように努めました。

イ 作業時期が晩秋になると、落葉を踏みしめての作業となることから、安全地下足袋・長靴のスベリ止めの効果が極端に低下してしまいます。

そのため私達は、休息時・休憩時等には、各自がスベリ止めのピアノ線に付いた落葉等を取り除き、保護具としてのスベリ止めの効用を果すように努めました。

足元の確認については、具体的実施事項の拡大に、今後、更に取り組んでいきたいと思っております。

## (3) 刃物の切創防止について

刃物災害も足元の不確認による災害と同様、災害発生率が高く、災害の程度も場合によっては大きいものとなります。

特に、刃物は常に切れ味の良い状態を保っているため、慎重な取り扱いが必要であります。そのためには、刃の部分に直接触れないような措置を講ずることが、刃物災害の防止の最善の方法であると考えました。

ア 砥石の改良

砥石の改良については、当署でも昭和60年に「研磨中の切創防止と経費の節減について」発表しております。これは、砥石に木片を接着（セメダイン）して使用するもので、安全性の面からも各現場から大変好評を得ているところです。

今回の改良は、仲間のヒヤリ・ハットの体験から考えたもので、砥石と木片の間に仕切りを入れて、更に安全性の確保を高めたものです。

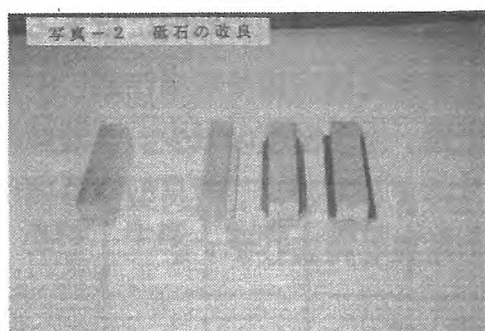


写真-2のように、これまで使用しているものについては、木片部分に更に小さな木片を袖付けして砥石部分を仕切り、また、新しく作るものについては、左右に1cm程度の巾が出るように薄い板を仕切りに入れることにしました。これにより木片部分を握る場合、直接砥石部分に触れることがなくなり、

研磨中の切創防止の効果が一層高くなったと考えています。

#### イ 鎌のスベリ止めについて

鎌の使用に当たっては、鉋・鋸のようにその都度鞘に納めることができないことから、細心の注意が必要であります。

特に、柄が滑り咄嗟に刃部に触れて切創した災害も多く聞いており、私達はこのような瞬時の備えとして、柄の目釘の下部付近にチューブを巻き付けて、滑り止めを講ずることにしました。これからの作業の中で、災害の未然防止に役立つものと考えております。

#### おわりに

私達のこれまでの取り組みは、受け身であった安全活動を反省して、自主的な安全活動への脱皮を目指したもので、それなりに一定の成果を得ることができました。

しかし、造林事業は行動範囲が広く、日々作業環境が変化することから、今後も様々な体験を話し合い、更に改善・工夫していく考えであります。

安全はゴールのないマラソンであるといわれますが、これまでの仲間の貴重な会話を糧として、更に気力を充実させて、今後も災害の未然防止に積極的に取り組んでいく考えであります。

今後のご指導をお願いし、私の発表を終わります。